

米穀情報

◆多収品種の施肥コスト、新技術などに焦点(ヤマタネ)

(株)ヤマタネが開催した第8回萌えみのり栽培コンテストでは、「持続的営農の実現に向けた課題と求められる取り組み」をテーマにパネルディスカッションが行なわれた。今後の課題として、多収化と肥料コストの両面を踏まえて損益を見極めることが重要との指摘や、栽培データの活用法、機器等のハードの進歩がポイントになるとの意見が出た。パネリストは、ヤマタネの山崎代表取締役社長、そでうらファームの佐藤代表理事、新みやぎ農協の千田理事、秋田ふるさと農協の小田嶋代表理事組合長、進行はヤマタネの伊勢米穀部長。概要は以下の通り。

【農業経営・コスト削減】▽山崎社長＝多収品種に取り組む上で、肥料を増やせば収量は増えるが、コストと収益の兼ね合いに目を向けるべき▽小田嶋組合長＝無理な多収、控えめな多収も上手くいかないのが、損益分岐点を見定めることが重要となる。また、生産者の一番の願いは大きな価格下落がないことなので、作況等に踊らされることのない、需要と生産がマッチした価格形成が求められる▽佐藤代表理事＝次の年に最終清算する方式と比べ、ヤマタネの一発買い取りは確かに1つの魅力となっている。生産者と卸がウインウインの関係を築くには、1俵ではなく反当たりで価格を考えることも重要で、同時に、損益計算書や貸借対照表を見ながら、しっかりと経営に踏み込まなければならない▽山崎社長＝コスト削減のため、農産物検査ではなく炊飯米として一定の品質を満たしているかを評価するのはどうか、カントリーでなく我々の精米検査で品質を確保するのはどうか、といったことを考え、物流効率化の面でも精米年月日の問題などに目を向ける必要がある。まだ実現していないが、生産者と一緒に会社を作り、利益を会社に溜めておくという案もある。生産者に負担がかかった場合はそちらに配当するといったダムの機能を、このチームに取り入れたい。そのほか、二期作なども含めて自由な発想で提案を行っていきたい。

【技術面の展望】▽小田嶋組合長＝行政がリードするのみならず、農家が主体的にIoTを取り入れ、農家の意図を組んだ技術的なイノベーションを目指すべき。ヤマタネとの連携でもその点に期待している▽千田理事＝e-kakashi(ソフトバンクの圃場データ分析システム)を含め、データが相当活躍するようになるだろう。今後はより多くのデータを持つ産地が勝つとみており、それをどう活かすかが大きな課題▽佐藤代表理事＝トラクターやコンバインの無人化やAIの活用はコストをかければ実現できると思うが、それを管理するのは人間なので、いざれにしても人材確保や育成が課題となる▽山崎社長＝中山間地の溜め池を管理する上で、ドローンを提案することも検討したい。既に国交省がダムの打検に取り入れる事例もある。ハードや機械技術について、模索していく。

◆「ライザップ牛サラダエビアボカド」発売(吉野家)

吉野家は、ライザップとのコラボレーション商品の第2弾として共同開発した「ライザップ牛サラダエビアボカド」を2月6日から全国で販売(一部店舗除く)している。牛丼のご飯の代わりにサラダを使用する高タンパク質、低糖質商品。牛肉、エビ、アボカド、鶏もも肉、ブロッコリー、キャベツ、玉ねぎ、半熟卵が入ったカロリー400kcalのライザップ公認メニュー。価格は600円+税。テイクアウトが可能。

昨年5月9日から販売開始した第1弾の「ライザップ牛サラダ」は、発売開始から74日目となる7月21日に100万食を突破、今年2月5日現在では200万食を突破。ボディメイクや糖質制限をしている消費者に支持されているという。